

児童養護施設職員の業務上のストレスが私生活に与える影響

佐藤由香理¹・大橋智樹²#

(¹ 児童養護施設 仙台天使園・² 宮城学院女子大学)

【背景と目的】

児童養護施設は、養育困難や虐待などさまざまな理由により家庭で生活することが難しい子ども達が、家族と離れて暮らす生活の場である。近年、中でも虐待に代表される不適切な環境におかれていた子ども達の入所が増えてきている。このような環境におかれてきた子ども達は、心身ともに傷つき、対人関係や情緒面などで問題を持つ傾向が多い。児童養護施設職員は、何人ものこのような子ども達を保護者に代わって養育、さらにはケアしていくのだが、その負担は大きくストレスを感じているという職員も多い。そこで、そのストレスは、職場を離れてからも引き続き感じることがあるなど、私生活においても何らかの影響を与えているかということについて調査する。

【方法】

調査対象者

子ども達の養育に直接関わっている直接処遇職員7名に対し、業務の合間の会話の中で、以下の内容に焦点を当てインタビュー調査を行った。

インタビューの内容

日頃、子ども達と関わる中で、ストレスは感じるか。感じているという場合、それが私生活まで引き続いたり、何か影響を及ぼしていることがあるか、ということについて自由に回答してもらった。

【結果】

日頃、子ども達と関わる中でストレスなどを感じるか、ということに関しては、全員が感じると答えた。また、そのストレスが私生活に何か影響を及ぼしているか、ということに関しては、全員が何らかの影響があると答えている。それらの内容を分類してみると、1) 心理的影響(イライラ、悲しい、ショック、子どもは本当は嫌いじゃないのに嫌いになりそうな気がする、家に帰っても思い出し落ち込む、家に帰っても子どもの声が聞こえている感じがする、夢をみるなど)、2) 行動的影響(過食、家族にあたる、疲れ果て家では寝てばかりいる、辞めたいなど)、3) 身体的影響(肩こり、倦怠感、腰痛、円形脱毛、熟睡感がないなど)

【考察】

子ども達と関わる中で、全員がストレスを自覚しており、私生活への影響についても、帰宅等業務終了後も上記のような心理状態が続いたり、自分自身だけでなく家族などにも影響を及ぼすなど、何らかの影響を与えていることが明らかになった。また、回答内容を詳細にみると、「夢をみる」という反応は全員が回答しており、その結果、「熟睡感がない」や、「起きたときに嫌な気分になる」など、睡眠への影響が一番多かった。睡眠という人間の基本的な生理現象が妨げられることは、身体的にも心理的にも疲れを残すなど、大きなダメージを受けられる。さらに、子どもに対する消極的な気分、消耗感、離職を考える等、バーンアウトにつながる要因も示唆される。また、聞き取りの中で、ストレスを感じる要因は子ども側の要因の他に、子どもとどう接してよいか分からないや、自分の処遇に自信がないといった職員自身の要因もきかれた。これらのことから、直接処遇職員の抱えるストレスは大きく多様であり、子ども達だけでなく、そこで働く職員のケアも必要であると考えられる。しかし、現状ではそのようなシステムや特定の専門的な相談の場などは確立しておらず、趣味などを介して発散をしている状況であるが、それら個別の努力に解決をゆだねるのは限界がある。したがって、職員の処遇などに関する技術的な面から、子ども達から与えられるストレスなどの心理的な面までのケアを、トータルにサポートできるシステムを取り入れることが求められる。これらのことは、職員のメンタルヘルスはもちろん、職員が安定することで、子ども達に対しても、より安定した、適切な処遇が行われることにつながるといえよう。